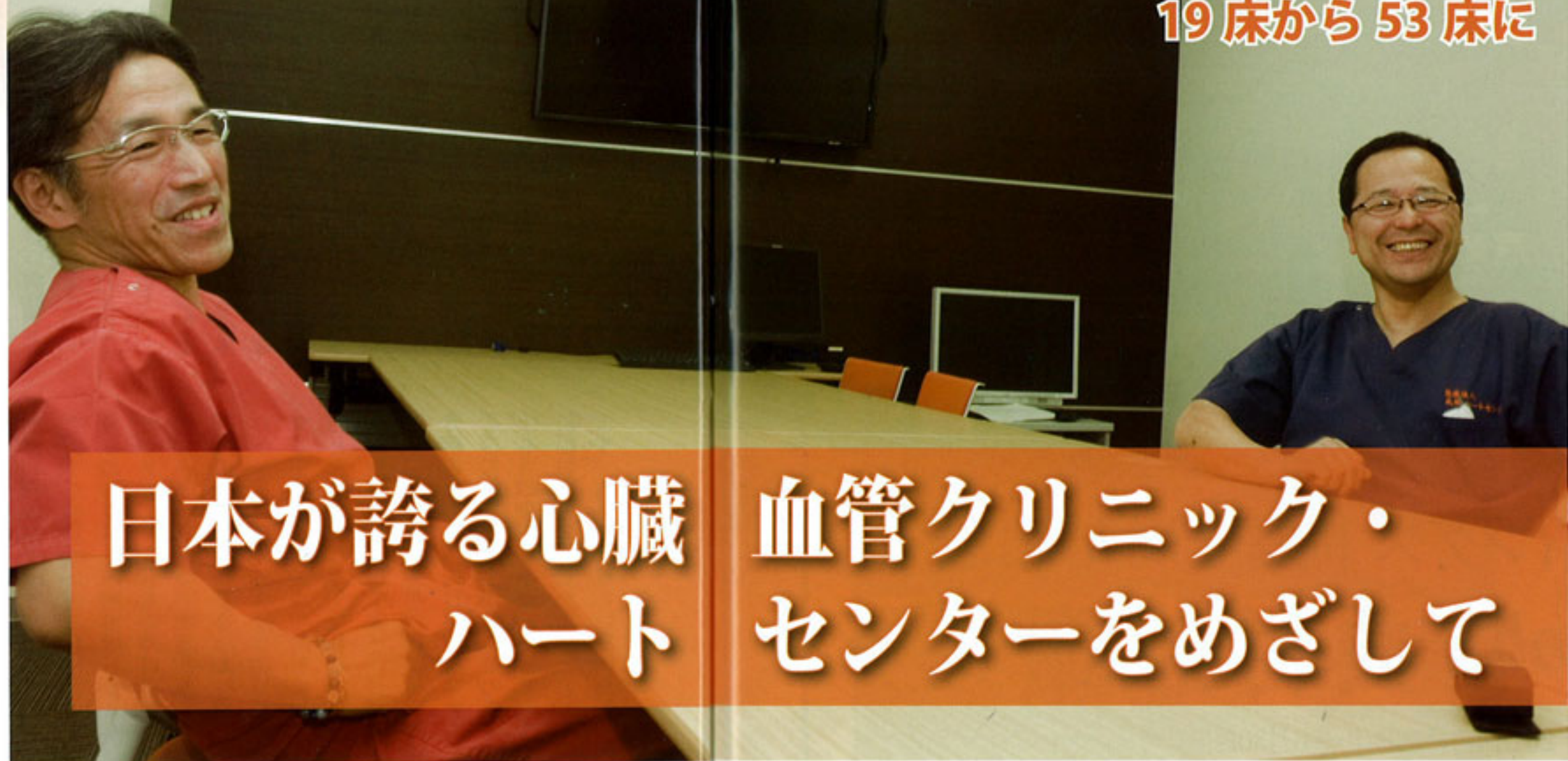


札幌心臓血管クリニックが病院化 19床から53床に

循環器内科、心臓血管外科の両方の分野で道内トップの治療件数を誇る札幌心臓血管クリニック(札幌市東区)が、グループ病院である札幌心臓血管・内科・リハビリテーション病院(同手稲区)から病床を移動し、この5月から53床の病院として再スタートをきった。道内最多の心臓カテーテル治療件数を経験してきた藤田勉理事長、同じく道内で最も数多く心臓外科手術を行ってきた道井洋吏副理事長の2人に理想とする医療像を語ってもらった。(聞き手 本誌編集長 工藤年泰)



日本が誇る心臓 血管クリニック・ ハート センターをめざして

きっかけは1通のメール

まずは2人の出会いから。

藤田「道井先生の名前はもろろんかなり前から知っていたんですけど、不思議と会わなかったんですよ」

道井「ただ、実は藤田先生と僕は国立循環器病センター(大阪府)で同じ時期に在籍していたらしいんです」

藤田「平成元年にね。あれから僕は循環器内科を志すようになりましたし、お互い転職となった時期でした」

道井「大阪から帰ってきて2人とも北海道でがんばってきた。そして今は同じ場で同じ思いで働いている。不思議な縁を感じます」

——そんな2人が実際に会うようになったきっかけは。

藤田「僕が長く勤めていた病院を平成20年に辞めることになって、クリニックを開業しようという時期に道井先生がメールをくれたんです。同世代として応援している、がんばってもらいたいってエールをいただいた。背水の陣で挑んだ独立でしたし、精神的にもかなり大変な時期だったのでとてもありがたかった」

道井「藤田先生が突然退職したというのを人づてに聞いてとにかく驚き

ました。同時に『よくやるな』って。今まで通りやっていけば安泰だったものを捨てて自分の理想に挑むわけですよね。同世代として応援したいのある業者の方に世間話でこぼしたら『それ、素直に伝えてみたらどうですか』と言ってくれました。それでメールしたんです」

——そんな2人が今はタッグを組むことになった。道井先生は去年の1月から副理事長という責任の重い立場で合流しましたが、これは双方大きな決断だったのでは。

道井「藤田先生とはメールをしてからときどき食事をするようになって、その中で一緒にやろうと誘われたのではなく、実は最初、僕も開業してみたらって言われたんですよ」

藤田「僕もなんとかできたし、先生もいけるんじゃないかって」

道井「ただし、心臓血管外科の手術メインでクリニックを開業というのはあまりにも無理があるなど」

藤田「そんな折に札幌市手稲区にある医療法人の事業継承の話が持ち上がった。どうするか判断するときに道井先生と一緒にやるなら事業継承して医療法人化する、道井先生が合

ていなかったわけでもありません。心臓血管外科の治療も院内で患者さんに提供しなかったんです。それは絶対に患者さんのためになりますし、患者さん本位の考え方に沿った方針でもあるはずなんです。しかし、そうすると入院期間などを考えればベッド数が必要になり、どうしても病院の規模は大きくなってしまいます。もともと小規模なクリニックで患者さんと近い距離で医療をやりたい、というのが僕が独立した理由でしたから、安易に心臓血管外科を作るということにはなりませんでした」

——道井先生と一緒にやるとなれば話は変わって来ると。

藤田「心臓血管外科を設けるなら、道井先生クラスの医師でなければ、結局は循環器内科の僕が主導する心臓血管外科になってしまいますから、メリットがあまりありません。そんなふうに考えていたらまたまた道井先生とタッグを組む機会を得て、実際に一緒に働いてみると、予想以上に素晴らしい。道井先生の腕も素晴らしいんだけど、僕らが組むことによつて起きている事象が理想に近いカタチだと感じています」

道井「僕もいろいろな施設で循環器

流しないのならこれまで通り19床で十分だと考えていました」

僕もチャレンジしたい、という気持ちになったんです」

——道内ナンバーワンの心臓カテーテル治療件数を誇るクリニックに、道内最高といっても差し支えない心臓血管外科の精鋭チームが合流することにになりました。その化学反応をどう感じていますか。

藤田「僕は循環器内科の専門医としてほぼすべての心臓の病気をカテーテル治療で治せると自負してきまして。でも、心臓血管外科を必要とし

てほぼすべての心臓の病気をカテーテル治療で治せると自負してきまして。でも、心臓血管外科を必要とし

内科と仕事をしてきましたが、トックラスとはこういうものなのかと目からウロコの日々です。何気なくスムーズにやっているようで、ぱっと見たところではわからないんですけど、細部を見ると仕上がりがまるで違う。トラブルが起きないように先手先手を打っているんですね。それは心臓血管外科にも通じる部分が多々あって、循環器内科の手法や考え方に対してすごく学ぶところがあるんですよ」

藤田「僕も同感。毎日のカンファレンスから大きな刺激を受けています。セクショナルリズムを捨てて、お互いの手の内をすべて晒して話し合い、知識をシェアしてからです毎日進歩を実感しています。これは患者さんにとつて大きなメリットなんです。同時に僕と道井先生の良いところを次の世代の循環器内科医と心臓血管外科医に伝えていけるところがすごくいいなと感じています」

道井「このような環境で次の世代を思いっきり育てられるのは無上の喜びです。自分で難しい手術をやり遂げることも充実感はあるんですけど、それ以上のものですよ」

藤田「技術や精神を引き継いでいく



藤田 勉(ふじた つとむ)
昭和61年旭川医科大学医学部卒。同61年に札幌徳洲会病院、平成元年に国立循環器病センターを経て、同2年札幌東徳洲会病院へ。同12年に同院副院長兼循環器センター長、同18年に院長代行。同20年、札幌心臓血管クリニックを開設。同23年に医療法人化、理事長に。日本内科学会認定医・専門医、日本救急医学会専門医、日本循環器学会専門医、日本医師会認定産業医、日本心臓血管インターベンション治療学会指導医

この件数と結果は残せていません」
——開院から5年での急成長ですが、感じている課題は。
藤田「たくさんありますよ。まず、外来の待ち時間。日々の業務の中で課題は見つけるたびにその場で解決を模索しますが、これは今のところほとんど解決できていません。ただし、これには理由があって、一般的な医療機関でしたら初診の場合は話を聞いて、検査の予約をして、そして検査結果を聞きに来ますよね。患者さんは3度も病院に足を運ばなければいけない。それを当院は1日で終わらせています。その日のうちに検査結果を出しているんです。僕らが扱っているのは心臓の病気。一刻を争う状態かもしれませんが、一刻の方針は変えられません」

内科・外科・不整脈の3本柱
——19床だった札幌心臓血管クリニックがこの5月からいよいよ53床の病院としてスタートします。
藤田「循環器内科医の僕としては病院になることによってローターアブレーション療法が再び提供できるようになるのが大きなメリットです。この治療法は非常に硬く変性した動脈硬化に対処できるのですが、厳しい施設基準がありこれまで提供できませんでした。僕がこれまで提供できなかったローターアブレーション療法の症例数は2千例を超えていて、その有用性は熟知していますし、今回その施設基準もクリアできたのでまたこの治療法を患者さんの選択肢に加えられる嬉しく思っています」

道井「さらに鶴野(起久也)先生が常勤になったことで循環器内科と心臓血管外科、不整脈外来の3本柱で患者さんに医療を提供できるようになったことも嬉しい出来事です」
藤田「不整脈の種類はなかで心房細動という高齢者に多い病気があります。これを放置すると血栓ができやすくなって脳梗塞のリスクが高まってしまう。実際、脳梗塞の3割が心房細動が原因といわれています。これを根治させる治療として期待されているのがカテーテルアブレーションで鶴野先生はそのスペシャリスト。僕らのカテーテル治療や外科のバイ



19床でスタートした札幌心臓血管クリニックは開院から5年目で増改築、6年目は53床の病院として再スタートをきった

パス手術というのはある程度確立した技術ですが、このアブレーションはまだまだ成長過程で、手術する人によって結果が大きく変わります。鶴野先生の技術を北海道の人に提供できることは本当に良かったと感じています」
——全国トップクラスの循環器内科と心臓血管外科、そして不整脈外来。心臓の病気ならすべて治療できる体制が整いました。
藤田「背水の陣で挑んだ開院から5年で予想以上のスピードで成長できました。これはすべて周囲の方々の支えがあったからで、感謝しきれません。そして5年後どうなっているのか楽しみです。5年でここまで来れたから10周年はどうなっているのか。これまで通り手を抜かず、全力で走り抜けて誰も真似できない組織を作り上げたいと考えています」
■医療法人 札幌ハートセンター
*札幌心臓血管クリニック
札幌市東区北49条東16丁目8-1
☎011-784-7847
*札幌心臓血管・内科・リハビリテーション病院
札幌市手稲区前田6条16丁目1-2
☎011-683-4141



道井 洋史(どい ひろさと)
昭和60年札幌医科大学卒。同61年に北海道立北見病院、同64年に国立循環器病センター、平成4年に国立療養所帯広病院を経て、同5年に北海道大野病院へ。同17年同院院長、同22年より勤医協中央病院 心臓血管外科センター長。同24年から札幌ハートセンター副理事長、札幌心臓血管クリニック院長に就任。専門医認定機構認定心臓血管外科専門医、日本循環器学会専門医・代表正会員、日本外科学会専門医、日本胸外科学会認定医・専門医、日本冠動脈外科学会評議員、日本胸外科学会北海道地方会評議員

のは、僕らが一緒にやることのミッションのひとつ。札幌ハートセンターの医療を次の世代に引き継いで、僕らがいなくなっても良い病院であり続ける仕組みを作っていきたい」
セクシヨナリズムを超えて
——狭心症や心筋梗塞といった虚血性心疾患では循環器内科にも心臓血管外科にも確立された治療法がありませんが、どちらにするかどうやって決めるのですか。
藤田「ルールは明確です。このような場合はこの治療、といったガイドラインがあるんですよ。患者さんの状態によって治療方法はさまざまですが、基本的にはこのガイドラインに則って治療法を患者さんに提示しています」

道井「患者さんに『どちらにしますか』と提案するわけですけど、その場合、内科がすごくいいけど外科がイマイチあるいはその逆のパターンといった施設では困るわけです。どちらの診療科目の治療にしますかと問うときには、どちらの科目でも完全な治療ができなければ患者さんに選択権を委ねられませんよね。どちらかが不完全であれば、あつちはいマイチですからこっちにしましょうねと言っているようなもので、選択肢が無いのと一緒にです」
藤田「当院は循環器内科と心臓血管外科の実力が拮抗している全国的にも珍しい施設ですから、その意味では本当の意味での選択権を患者さんに提供できているかな、と思っっています。内科では難しい症例だから外



朝の全体朝礼の様子。左から藤田勉理事長、道井洋史院長、南淵明宏スーパーバイザー、鶴野起久也リズムセンター長

科で、あるいはその逆というパターンは絶対にあってはならないことです。患者さんにとって何が本当に一番の治療なのかと突き詰めていかなければなりません」
——昨年は心臓カテーテル治療が1786件で全国4位の症例数でした。最近の推移は。
藤田「昨年は1932件で全国2位になりました。これは件数を増やそうと思っただけでなく、理想とする医療をめざしていたら結果的に件数が増えたと感じています。昨年1月に道井先生が合流して以来、患者さんがさらに増えて、今が開院以来最も患者さんが多いですね」
——患者増の秘訣は。
藤田「当院の場合、最初に来院されたときに主に僕が鹿島(由史)副院長が診て、そこから必要なセクシヨンにつないでいきます。そしてどの医師であっても同じ医療が提供されるような工夫もしています。そこが強みのひとつでもあると思います」
——たとえ大きくて有名な病院でも最初に診察に入った医師によって治療の行く末がずいぶん変わるといふことが実際のところよくあります。
藤田「当院もいざれ診察する医師をもっと増やしていかなければなりませんし課題として試行錯誤しているところですが、今はなるべく僕が最初から最後まで一貫して患者さんに関わりたいと思っています」
——道井先生は去年の1月から来られて自ら設計した手術室でいかになくその技術を発揮されているということですが。
道井「昨年4月からちょうど1年間で360の開心手術を行なっています。そのほかの手術(腹部の動脈瘤など)を入れると400例を超えます。これは今までにないハイペースですが、今は手術の準備から最後の詰めまですべて任せられる仲間がいますので、僕は肝心な部分だけ力を尽くせばいい。仲間がいなければ